

### 一枚の写真から(一九六七年度法政大学国文学会総会研究発表要旨)

片桐, 登

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

32

(終了ページ / End Page)

33

(発行年 / Year)

1967-10-20

(URL)

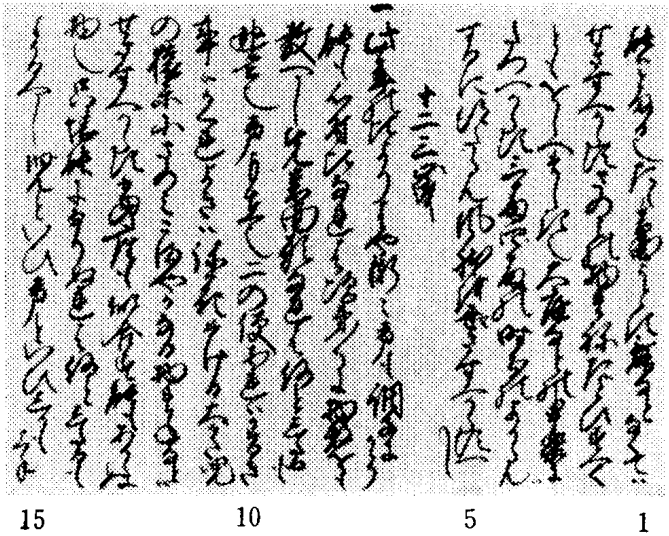
<https://doi.org/10.15002/00019192>

# 一枚の写真から

片桐 登

吉沢義則氏『室町文学史』昭和11年第308、309頁に風姿花伝の一部分の写真が載っている。

この写真に撮された写本(以後吉沢本といふ)は、『文学史』出版以前にも、そして出版以後にも紹介



されたことがないし、実は写真掲載に際して、当時の所蔵者も明記されず、今にいたるもその所在を聞かない。写真を一読すれば、本書がさほどの善本ではないことが察知されるから、多くの人々の目にふれながらも、関心をひかず無視されてきたものと思われる。しかし、本書が意外な面白さを持たぬでもないので、ここに紹介しておこうと思う。もちろん、この二頁の写真から、花伝研究に重大な影響を及ぼすとかどうとかいおうとするのではない。せめて、この部分からだけでも分る範囲のことを、分相応に述べておこう、というだけのことである。

さて、吉沢本花伝は、一見してその伝写の系統を推測せしめる特徴的部分が、まず二カ所は目につく。その一は、各段の見出しで、「十二三歳」「十七八歳」の「歳」であり、その二は、書出し冒頭の「一」である。この二点を有しているのは、四卷本系、そのうちでも乙種である八帖本系統のものであることはまず間違いない。管見に入った四卷本系諸伝本六種八本(観世・生駒・鴻山・文庫・観世・謡秘・伝書・八帖三種・古活字・整版・写本・北岡)の比較の結果もそれを証明している。結果のみを略記すれば次の如くなる。

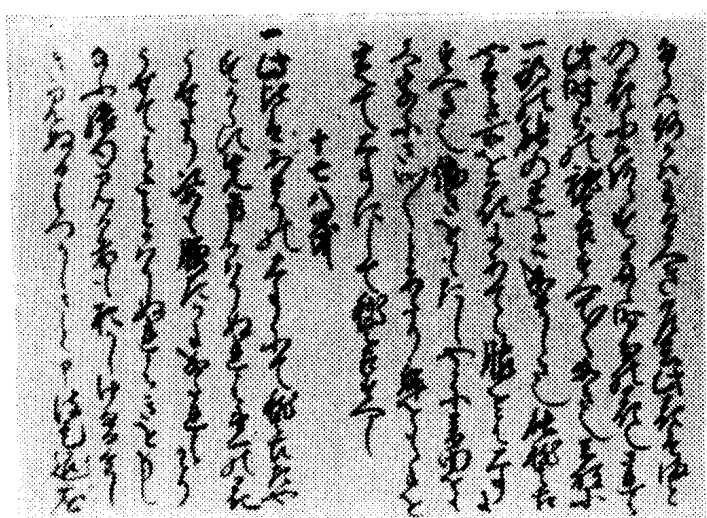
甲種である生駒・観世両本は、先にあげた

「歳」がそれぞれ「より」となっており、書出し冒頭の「一」もないのははじめとして、写真9行目の①「音曲形」が「とうきやう」となっている点、さらに27行目の②「かかろうせて、はたと……」の「うせて」の次に20字を超える異文が挿入されている点(入る方が正)、など、明らかに系統を異にする。

乙種のうち、北岡本も吉沢本と近い関係にあるが、北岡本に「歳」はあっても「一」がない点や①②が甲種と同じ形をとっている点などが八帖本とは異って(従って吉沢本とも異なる)おり、乙種枠内での系統をやや異にしているといわねばならない。

一方、八帖本はどうか。八帖本三本の相互の異同はともかくとして、吉沢本との関係は先の推測の如く最も近い。八帖本独自の異文としては、先の二点に加えて、他本が、「声もたつころなり」とする所を「声自在也」とする点などであるが、それらは吉沢本と全く一致する。もちろん②の異文がない点も同じ。吉沢本と異なる部分でも①が、それぞれ「音形」「声形」となっているなど、同系統であることを証明するかの如きものもある。

いったい八帖本は、室町期のうちからすでかなり流布した本で、「花伝書」と称して



16

20

25

30

はいるものの、世阿弥の風姿花伝はその一部を含んでいるにすぎない。しかし、江戸期に入って、古活字版や整版本が出版されるに及び、実演者たちには大きな影響を与えてきた本で、書写される機会も多かった。

それでは、八帖本の特徴のほとんどを具備する吉沢本は、その一異本なのだろうか、というところでもないらしい。

吉沢本7行目の「比よりはや」が八帖本では「比よりははや」、11行目の「よきは」が「よき事は」、13行目「あがらぬ物也」が

「あがらぬさうなり」、20行目「脇をば」が「わざをば」、25行目「たやすからず」が「たすからず」となっている点などから、吉沢本は八帖本と見ることはできないであろう。

もう一つ、『文学史』出版当時の、世阿弥伝書研究の水準からみても、吉沢氏が八帖本を「花伝書」として掲載したとは思えない。

吉沢本は風姿花伝四卷本系の一異本であるうと思われるのである。

ところで、四卷本風姿花伝は、花伝第一年来稽古条々から第四神儀に相当する部分までで終っている諸伝本の名称で、その意義や諸本の性質については、表章氏『四卷本風姿花伝考』(岩波『中世文学』の『世界』所収)に詳しい。その一端を要約すれば、四卷本諸本は「誤写や欠脱の多い後世の転写本ばかりで、各伝本を単独に考察しただけではほとんど資料的価値」はない。しかし「現存しない祖本の形態に復原することがある程度可能で」その祖本の内容は、金春、宗節、吉田本など「翻印三本の性質や、風姿花伝の各篇成立過程について、軽視しえない問題を提起する」(表氏前掲)のである。

こうした意義をもつ四卷本諸本に対して、吉沢本はどのような位置をしめるのだろうか。先にもみた如く、本書は八帖本の異本ではな

く、四卷本系乙種に属し、八帖本、北岡本などと並列されて然るべき一異本であった。もちろん本書も末流の、誤写を多く含んだ転写本であることは容易に想像できるし、掲載された写真がすでにそれを物語っている。

しかし、本書を、八帖本に極めて近いが八帖本そのものではない、とした時、まず第一に考えられることは、本書の祖本と八帖本の祖本との関係である。どこでどのように交錯しているのか、それが明らかになれば、乙種本原本想定への足がかりも皆無とはいえない。吉沢本が、八帖本親本のそのまたもとになった乙種原本の姿を全くとどめていない、ともいえないのである。さらに妄想をたくましくすれば、表氏論考にみられる如き大きな問題に結びつかないともいえないし、風姿花伝各篇成立過程を明らかにするうえの歯車の一つたり得ないとも限らないのである。

一枚の写真を見て、誇大妄想に近いところまでできてしまったが、四卷本系諸本が花伝研究に占める意義を考えると、そして自分の予想の当否を知りたいというクイズ的興味を持つとき、吉沢本花伝の全貌を知りたいのである。